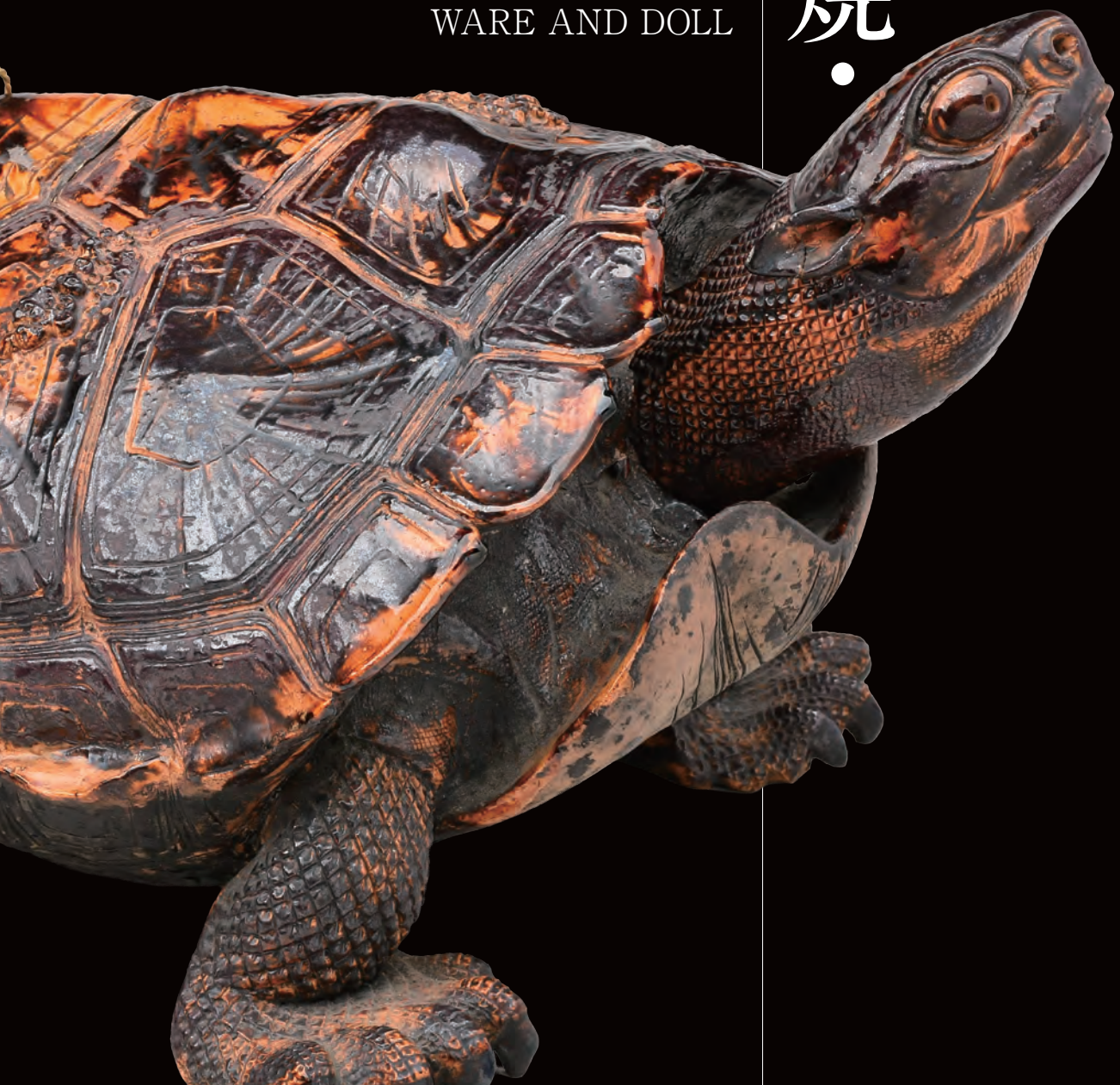
石見長浜焼・長浜人形

IWAMI NAGAHAMA
WARE AND DOLL



石見長浜焼・長浜人形

椋木 賢治

永見巌――。この優れた工匠の名を知る人は、もう多くはないのだろう。表紙の写真を見てほしい。亀の頭部を中心にクローズアップしたものだが、実にリアルに作られている。陶芸作品であることは、表面の質感から感じ取れるかもしれない。粘土を象ったものを焼成し、釉薬をかけて仕上げている。成形は型によっており、首部をはじめ甲羅や腹部、手脚や尾からなる複数のパーツが組み合わされている(No.6)。

亀の頭部を形成する部分、目、鼻、口、耳、そして甲羅から伸びる首――。その各部位、それぞれの異なる形態と質感とが的確に表されている。とりわけ首や手脚の表面を覆う網目状の皮皺の刻出には目を見張る。甲羅は規則的で立体的に作られることに加え、表面の所々にはフジツボが付着している。

総じて首を上方に伸ばそうとする自然な動きを感じさせるばかりか、生命の意志の存在をいつしかそこに見出している。黄褐色と暗黒色とが織りなす艶やかな釉色は琥珀を思わせ、永遠の時の経過が結晶化したかのような、重厚でそしてあくまでも天然の美しさが全体を覆っている。

かくも優れた造形技術を駆使した上質な芸術作品でありながら、内部は空洞で、甲羅の中央には蓋状の細工がほどこされている。つまり本作は香炉としての用途をまっとうすべく作られた、紛れもない工芸作品なのである。江戸時代後期、石見地方における物づくりの水準の高さに驚嘆を禁じ得ない。

永見房造は島根県西部、石見国浜田の長浜浦で代々窯業をいとなむ家系に生まれた。永見巌はその号であり、江戸中期から明治の末まで五代にわたり用いられている。初代巌は18世紀の後半から活躍し、文政3年(1820)に没している。この人物が、永見家代々の窯業に革新をもたらした。明和3年(1766)、浜田の東隣、いまの江津市に住した石見根付の名工・清水巌(1733-1811)に師事し、習得した技術を焼き物の生産に展開、「巌」の号も師・清水巌から受け継いだものと云う。

根付と陶器とでは大きさや製法など、随分と勝手が異なるようにも思われるが、事実、永見家には永見巌制作の石見根付が伝わっており(No.16ほか)、その修練のあとを実際の作品に見ることができる。また師の清水巌自身、制作の範疇は石見根付に留まらず、蝦蟇や蓑亀など木彫作品の遺例も散見されることから、その仕事は製陶の原型制作にも一脈通じるものとも考えられる。

ただし清水巌の家系も、娘の文章(1764-1838)、孫の巌水(1809-48)と優れた名工が続いており、永見家代々との関係も実際には数代にわたる可能性がある。ちなみに永見家には巌水作の根付(No.15)も伝来しており、直接的な関係を示唆している。とくに巌水については父が丸物師(粗陶器職人)で巌水自身も製陶に通じ、長浜に出向いて永見巌に原型制作や色つけを指導したとの伝承もある。

加えて亀や蛙、蟹といったきわめて特徴的なモチーフを共有することも石見根付と長浜焼、両者の距離の近さを裏付けている。長浜焼が孤立した存在でなく、地域的趣向を反映した文化的土壌に育まれていることを押さえておきたい。

長浜焼の製品には大きく分けて二つの種類がある。一つは床置物、一つは人形である。床置物は既述の亀をはじめ鯉(No.4)や蝦蟇(No.5)などの水生動物、あるいは虎(No.1)や獅子(No.2)、馬(No.3)、兎(No.7)、鹿(No.8)、猿などの十二支その他の動物、布袋(No.9)や神農、蝦蟇仙人といった福神や神仙などがある。飴色の釉薬を使うものもあるが、モチーフが動物の場合、毛並みにあわせた着色によるリアルな質感を追求した表現もある。眼に別素材を嵌入する場合もある。総じて重厚感のあるつくりで、床置物に相応しい作風である。

かたや人形は天神や恵比須・大黒(No.13・14)などの神仏に加え、内裏雛や歌舞伎の娘役(No.10・12)など桃の節句に飾られるもの、金太郎や武者など端午の節句に飾られるものなど、豊富な種類に恵まれている。大きさは置物に比べていっそう小さく、胎土はきわめて薄い。表面は顔料による手彩色で明るく軽快にほどこされ、背面の彩色はおおむね省略される。総じて時代の好尚を反映しやすく、風趣も大いに変わりゆく。古作に優れたものが多く、全国的にも評価が高い。

またとくに人形に関し、その受容の文化史的意義として注目されるのが、北前船による広い地域への流通である。一例として北前船の寄港地である新潟県佐渡島の小木町には、各地の人形がもたらされ、いまに伝わっているが、なかでも長浜人形の数量が圧倒的に多いことが知られている。

置物と人形、作風から見れば両者はまったく異なる様相を呈しているものの、前後型による成形を基本とする制作技術の基盤を共有している。置物には「永見巌」の刻銘や「巌」の印章がほどこされ、作家性を意識した一種のブランドのように見せている。人形のほうには銘などはなく、制作の年代を示す指標は基本的には認められない。稀に人形の贈り主や持ち主によって年紀が記される場合があり、参考になる。

なお永見家で使用していた型が千点以上現存しており、これらが浜田市教育委員会に寄贈されている。なかには制作年が記されるものもあり、作品の年代判定に役立つ。例えば《長浜人形 三番叟》(No.11)の型には安政6年(1859)の墨書があり、また《長浜人形 白拍子》(No.12)の型には慶応2年(1866)の墨書がある(浜田市教育委員会提供の画像による)ので、これを作品制作の上限とすることができる。もちろん型の制作以後、いつの時点で制作されたかは作品の表面仕上げなど別の要素により検討する必要がある。

代々受け継いだ型を用いて、また折々に新たな型を加えながら、長年にわたり制作が繰り返される生産方式のため、現存作品の年代判定は容易ではない。同じ型を用いた作品であっても、制作時期が異なりうるし、表面仕上げの技術や材料、趣向にも違いが生じる。このような状況によって、江戸時代から明治・大正・昭和へと移り変わる時代のなかで盛んにつくり続けられたことが、「長浜焼」「長浜人形」という言葉と概念、その実態とを混沌とさせている感がある。その伝存する総体は膨大であるものの、冒頭述べたような驚嘆すべき水準の作例は実のところ稀少である。まずはその優れたところを正しく理解し、掬い取ることが求められよう。

(島根県立美術館 学芸課長)

2 永見巌《長浜焼 獅子》

3 永見巌《長浜焼 馬》

1 永見巌《長浜焼 虎》

5 永見巌《長浜焼 蝦蟇》

6 永見巌《長浜焼 蓑亀》

4 永見巌《長浜焼 鯉》

9 永見巌《長浜焼 布袋》

7 永見巌《長浜焼 兎》

8 永見巌《長浜焼 鹿》

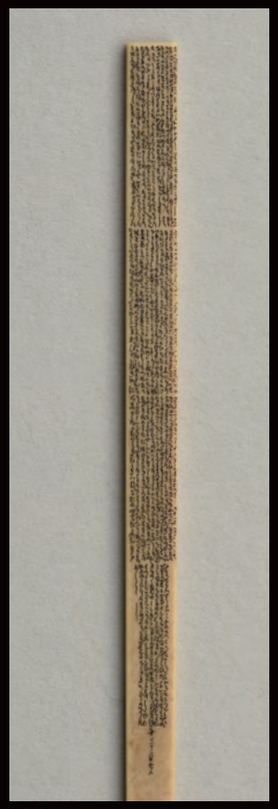
11《長浜人形 三番叟》安政6年(1859)以降

10《長浜人形 白拍子》

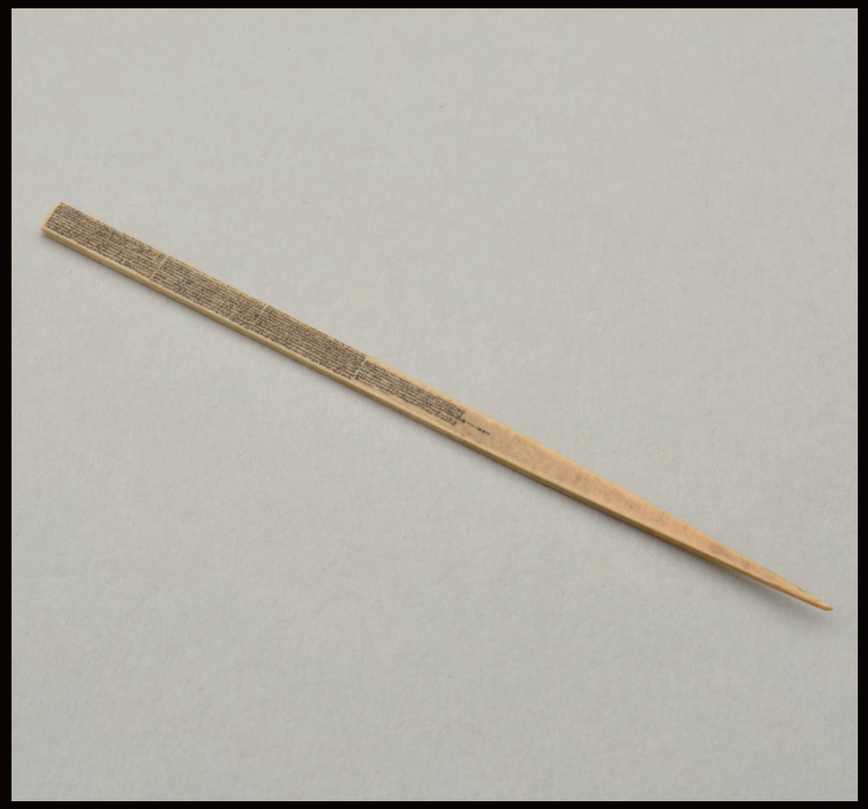
12《長浜人形 白拍子》慶応2年(1866)以降

14《長浜人形 大黒天》

13《長浜人形 恵比須》



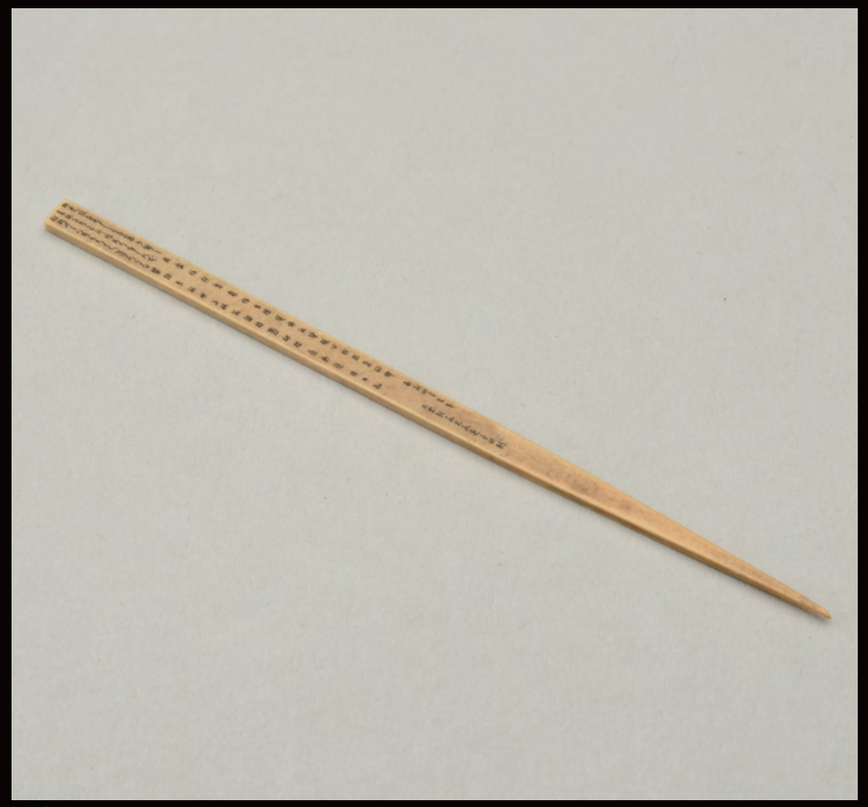
（部分）



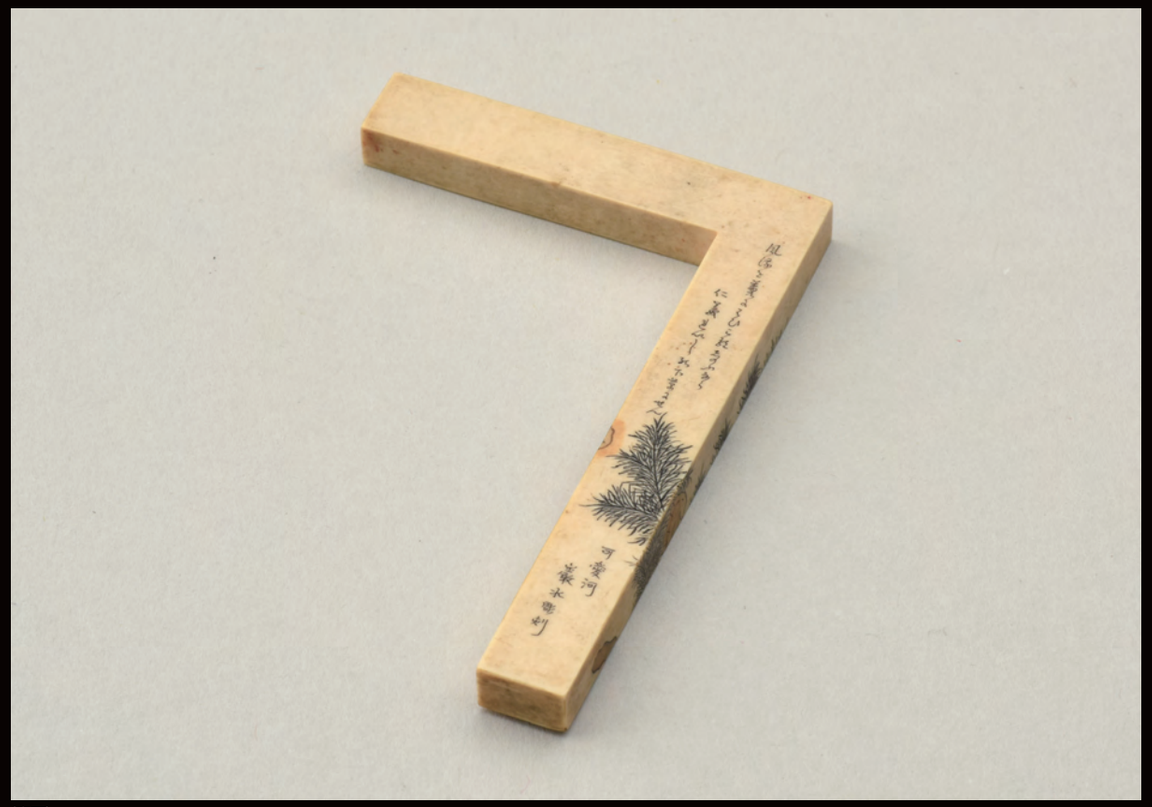
16 永見巌《根付 楊枝》嘉永4年（1851）

15 巌水《根付 曲尺》

（裏面部分）



（裏面）



（裏面）

永見家略年譜

	永見家は平高望（平安中期の賜姓皇族）の子孫と伝える。(a)
	その二十四代孫・永見氏隆が、文禄・慶長の役に出陣し、帰朝の際、現地の陶工・李陶仙と金陶人を連れ帰り、那賀郡大内村内田（唐人河内）で製陶の仕事をさせたという。(a)
慶長15年（1610）8月	氏隆没。(a)
	氏隆の玄孫・治平、長浜本陣に住し、本地屋と称す。(a)
万治年間（1658-61）	浜田藩主・松平康映の求めに応じ、治平は幼時、唐人河内でみた記憶をたよりに製陶に取り組み、成功したという。(b)
	その後、二代善六、三代治右衛門、四代文十郎、五代善四郎にいたるまで日用品を焼いていたという。(b)
明和年間（1764-72）	善四郎の死後、甥の六代城佐が人形を焼きはじめたという。(b)
天明年間（1781-89）	善四郎の実子・治三郎、津和野藩主・亀井矩貞より楽焼法を学ぶという。(a)(b)
寛政6年（1794）正月	城佐没。(c)
文化12年（1815）5月	治三郎没。(a)
	治三郎の子・房造、父の意により石見根付の名工・清水巌に師事、彫刻を学んで製陶に応用し、著しく発達したという。初代永見巌。(a)
文化14年（1817）9～11月	房造、人形焼研究のため長崎に遊学する。(a)
文政3年（1820）正月	房造（初代永見巌）没。(a)
文政8年（1825）正月	平治郎（三代永見巌）藩に類職差留を願い出て、認められる。 以後、明治3年（1870）まで同様の出願度々あり。(a)
嘉永3年（1850）4月	房造（二代永見巌）没。(c)
明治7年（1874）5月	平治郎（三代永見巌）没。(c)
明治40年（1907）頃	国太郎（四代永見巌）窯業を廃する。(c)
明治42年（1909）3月	国太郎（四代永見巌）没。(c)
大正6年（1917）1月	亀吉（五代永見巌）没。(c)

おもな参考文献

『島根県史 第九篇』1930年(a)、大島幾太郎『那賀郡史』1940年(b)、
三浦博文「長浜人形創家永見は旧三浦、和紙神楽面も創始」『郷土石見』120　2023年(c)
※上記略年譜中のアルファベットに対応。

永見家略系図

（初代）本地屋治平 ― （二代）善六 ― （三代）治右衛門 ― （四代）文十郎 ― （五代）善四郎 ― （六代）※甥・中継 城佐

（七代）治三郎 ― （八代）房造（初代永見巌） ― （九代）房造（二代永見巌） ― （十代）平治郎（三代永見巌） ― （十一代）国太郎（四代永見巌） ― （十二代）亀吉（五代永見巌）

石見長浜焼・長浜人形
2026年1月15日発行
会　　期：2026年1月15日（木）～3月9日（月）
会　　場：島根県立美術館　展示室3
編集・執筆：椋木賢治（島根県立美術館）
撮　　影：井上治夫（井上松影堂）
制　　作：野津敏靖（野津デザイン事務所）
発　　行：島根県立美術館
©SHIMANE ART MUSEUM 2026
令和7年度ふるさと島根寄附金を活用して作成しています。

表紙：永見巌《長浜焼 蓑亀》（部分）
※No.1～10、13, 14は三浦博文氏蔵、No.11、12は浜田市教育委員会蔵、No.15～20は永見家伝来（個人蔵）。

島根県立美術館
〒690-0049　島根県松江市袖師町1-5
TEL:0852-55-4700　FAX:0852-55-4714
https://www.shimane-art-museum.jp

18 伝永見巌《根付 蓮葉に蛙》

17 伝永見巌《根付 朽木に百足》

20 伝永見巌《根付 人物》

19 伝永見巌《根付 亀》

島根県立美術館